

歌唱集

追加分



ふるさと益田の応援団

近畿益田会 ハイキング部

益田市歌 「明日をむかえるまち」

作詞 谷上 寿昭

作曲 寺嶋 陸也

あさ かこう やな
一 朝もやにけむる 河口の家並み
はまべ う こぶね
浜辺に浮かぶ 小舟をながめ
しお か なみおと き
潮の香ほのかに 波音を聞く
ひかり
おだやかな 光のなかに
きのう まち
昨日とおなじ街がある

こも び ゆ やま はし
二 木洩れ陽が揺れる 山あいの橋
きし かわも うつ
岸のつつじが 川面に映る
あさせ かがや みず て く
浅瀬で輝く 水を手で汲む
くうき
さわやかな空気のなかに
きょう まち
今日がはじまる街がある

こくどう はし どうげ
三 国道を走り 峠をのぼる
おき いさりびとも
はるかな沖に 漁火点る
ゆうぐ しず ふもと
夕暮れ静かに 麓をつつむ
なが
ゆるやかな流れのなかに
あす まち
明日をむかえる街がある

あす ますだ
明日をむかえる益田がある

53

扇おしろい京都べに
また加茂川の鷺しらす
みやげを提げていざ立たん
あとに名残はのこれども

(向日町)

加茂川



54

山崎おりて淀川を
わたる向うは男山
行幸ありし先帝の
かしこきあとぞしのばるる

(山崎)

55

淀の川舟さおさして
下りし旅は昔にて
またたくひまに今はゆく
煙たえせぬ陸の道



56

送り迎うる程もなく
茨木 吹田うちすぎて
はや大阪につきにけり
梅田はわれを迎えたり

(高槻)
(茨木)
(吹田)
(大阪)

57

三府の一に位して
商業繁華の大阪市
豊太閣のきずきたる
城に師団はおかれたり

大阪城



58

ここぞ昔の難波の津
ここぞ高津の宮のあと
安治川口に入る舟の
煙は日夜絶えまなし

四天王寺

59 鳥もかけらぬ大空に
かすむ五重の塔の影
仏法最初の寺ときく
四天王寺はあれかとよ



60

大阪出でて右左
菜種ならざる畑もなし
神崎川の流れのみ
浅黄にゆくぞ美しき

(神崎)



61 神崎よりはのりかえて
ゆあみにのぼる有馬山

(西ノ宮)

池田 伊丹と名にききし

(住吉)

酒の産地もおるなり

(三ノ宮)

62 神戸は五港の一つにて

(神戸)

あつまる汽船のかずかずは

海の西より東より

瀬戸内がいも交じりたり

布引の滝

63 磯にはながめ晴れわたる

和田のみさきを控えつつ

山には絶えず布引の

滝見にもものほりゆく

64 七たび生れて君が代を

まもるといいし楠公の

いしぶみ高き湊川

ながれて世世の人ぞ知る



65 おもえば夢か時の間に
五十三次走り来て

神戸の宿に身をおくも

人につばさの汽車の恩

神戸

66 明けなば更に乗りかえて
山陽道をすすままし

天気はあすも望あり

柳にかすむ月の影

明治三十三年五月「地理教育鉄道唱歌(二)」
地理教育と銘打った鉄道唱歌は第一集から第五集まで発行された。作曲者はそれぞれ異なるが、最も人口に膾炙したのは多梅稚の曲です。

集	線	初版発行日	作曲者
第一集	東海道	明治三十三年五月十日	多梅稚
第二集	山陽九州	明治三十三年九月三日	上真行
第三集	東北地方	明治三十三年十月十三日	多梅稚
第四集	北陸地方	明治三十三年十月十五日	納所弁次郎
第五集	関西各線	明治三十三年十一月三日	吉田信太

